「ドイツ文学論集」29 (1996), 20-28 (日本独文学会中国四国支部) 所収

再帰動詞における sich の形態統語論と意味論

吉田 光演

0. 序論

sich に代表されるドイツ語の再帰代名詞は概略４つの用法に分類できる：

(1) 完全な文法機能をもつ照応的用法：Hans $_1$ bewundert {das Kind $_2$/ sich $_1$}.
(2) 再帰動詞と共起し、他の名詞句と置き換え不可能な再帰的用法：
Hans $_1$ schämt { sich $_1$ / *ihn $_2$ / *seinen Vater $_2$ }.
(3) 他動詞の自動詞化（Haider(1985)はこれを中動動詞(Mittelverb)と呼ぶ）：
Die Tür $_1$ schließt { sich $_1$ / *ihn $_2$}. (vgl. "Hans schließt die Tür.")
(4) 中動構文(Mediale Konstruktion)： Hier wohnt es { sich / *ihn} gut.
(vgl. "Hier wohnt man gut.") (下付き数字は名詞句の指示的指標、"*"は非文を表す)

"bewundern"のような他動詞では主語と目的語が別々の対象を指す場合も、目的語が主語と同一の対象を指す場合もある（照応関係の成立）。他方、(2)以下では目的語は主語と同一指示関係にあり、sich が不可欠である。これらの sich は先行詞をもつ点で共通するが、その他の統語的特徴は異なる。(3),(4) では、再帰用法以外に他の構文で同じ命題を表せるが、(1),(2)には他の対応構文はない((4)では "gut"のような副詞句が義務的だが、(3)は再帰動詞単独でもよい)。(1),(2)の sich の区別はやや混乱しており、その名称も(1)を真の Reflexiv、(2)を偽の Reflexiv と呼ぶ研究もあれば、逆に (2)を真の Reflexiv と呼ぶ研究者もいる。この揺れは sich の性質に関する次の立場の相違に基づくと思われる：

A) 項構造の観点：２項関係 P'(x,y)を表す動詞 P では目的語の y は通常主語 x とは別の対象を指すが、x と同一対象を示す場合 (=P'(x,x)) y が再帰代名詞化される。(1)の sich は目的語の文法機能をもつ真の再帰代名詞だが、(2)の sich は他の名詞句に置換できず、統語的自立性が弱い。故に "schämen"は１項述語であり、 sich は動詞の一部(Verbteil)である。(Grewendorf (1984) etc.)
B) 再帰動詞固有の観点： "sich erholen"等の sich はその他の文成分で代理できない要素であり、独自の再帰用法として分析すべきだ。(Duden (1984) etc.)

本稿の目的はこの両者の立場を止揚することにある。純粋統語的観点(A)に立てば、(2)は言語・語彙固有の個癖性(Idiosynkrasie)に還元する他はない。又、語彙論的観点(B)においても(1),(2)の関連は定かではない。しかし、(1),(2)の弁別の背後には何らかの文法的・認知的動機づけが存在するはずである。

本稿では生成文法の枠組みで(1),(2)の sich を形態統語的・意味的に分析する。sich は形態的に強い英語の再帰代名詞(oneself)とイタリア語の"si"等の接語の中間にある弱い再帰代名詞であり、定動詞近くに現れる。逆に sich selbst は強い再帰形で、sich と統語的な対比をなす。意味的には(2)は自発的・内在的な再帰性を表し、弱い再帰形を要求する。なおここでは(2)を内在的再帰用法と呼ぶ。

1. 再帰代名詞の形態統語論的な特徴

sich は３人称単数・複数および２人称単数・複数の敬称 Sie に対応する人称・数を担い、３／４格の格素性を付与される。典型的には、同一文中の主語と同一の指示対象を指す３／４格目的語として機能する場合に sich が現れる：[1]

(5) [文 Peter$_1$ sieht sich$_1$ im Spiegel]. (先行詞＝ Peter)

しかし、主語は主格と一致するとは限らない。AcI (=accusativus cum infinitivo) 構文では不定詞句の主語は４格目的語になり、sich の先行詞として機能する：

(6) Hans$_2$ ließ [den Mann$_1$ sich$_1$ im Spiegel sehen].

人称代名詞と再帰代名詞は先行詞による束縛において相補分布をなす。人称代名詞は同一文中に先行詞をもてない (=(7a))。逆に代名詞を含む文の外に先行詞があれば、人称代名詞と先行詞は同一指示関係をもつことができる(=(7b))：

(7)a. * [文 Peter$_1$ sieht ihn$_1$ im Spiegel] .
b. [文 1 Peter$_1$ glaubt [文 2 Hans$_2$ sieht {ihn$_1$ / *sich$_1$} im Spiegel]] .

人称代名詞と再帰代名詞は語順に関して興味深い特徴をもつ。代名詞類は強調されない限り中域の左端に現れ、１＜４＜３格の語順になる(Lenerz(1994))：

(8) a. Gestern hat meine Mutter meinem Bruder das Bild gezeigt. (Nom-Dat-Akk)
b. Gestern hat meine Mutter es ihm gezeigt. (Nom-Akk-Dat)
c. Gestern hat es ihm ja meine Mutter gezeigt. (Akk-Dat-Nom)

d. Gestern hat sie es ihm ja gezeigt. (Nom-Akk-Dat)

(9) a. Gestern hat sie sich ja das Buch gekauft. (Nom-Dat-Akk)

b. Gestern hat sie es sich ja gekauft. (Nom-Akk-Dat)

c. * Gestern hat (sich) sie (sich) es ja gekauft. (*Dat-Nom-Akk/ *Nom-Dat-Akk)

zeigen のような３項動詞の通常の語順は１＜３＜４格である(=(8a))。しかし３／４格目的語が代名詞化されると、４＜３格になり、主語の後に続くか(=(8b))、主語に先行する(=(8c))。主語も目的語も代名詞になると、１＜４＜３格になる。ja, doch 等の心態詞は基本命題部を表す動詞句(VP)の左端をマークすると仮定すると、代名詞類は動詞句を越えて左側に移動することになる。 この一般化は sich にもいえる(=(9))。音韻的に軽い代名詞（１音節(ich, mir, mich, du, dir, dich, er, ihm, ihn, es , sie, ihr, sich と man)、２音節でも一つは Schwa の[ə](ihnen）の規範的な位置は中域の左端（VP の外）である。一方、指示代名詞(der, die, das etc.)や不定代名詞 (einer, jemand etc.)や数量詞(jeder, viel etc.)等の強い代名詞と通常の名詞句(ein Buch etc.)は中域後部（VP 内）にとどまってもよい。 sich は定形第２位文では通常定形の直後に現れ、従属節では従属接続詞の直後に現れる。

(10) Im Laufe dieser drei Jahre *hatte* sich aber gerade für Georg vieles verändert. (Kafka)

(10)のように sich が定形の直後に位置する場合、 sich を一種の接語(clitic)、即ち従属的な語彙範疇 N と考え、 sich が定形に編入される（付加される）と分析できるかもしれない：(Kongr (<Kongruenz)は人称・数の一致に関する統語範疇)

(10') Im Laufe dieser drei Jahre [$_{Kongr0}$ [$_{Kongr0}$ hatte] [$_{N0}$ sich]] aber ....

特にタイプ(2)の用法では、 sich はほとんど中域の最初に現れる。しかし sich は他の人称代名詞と同じく弱い代名詞主語の左側に現れることはできない。

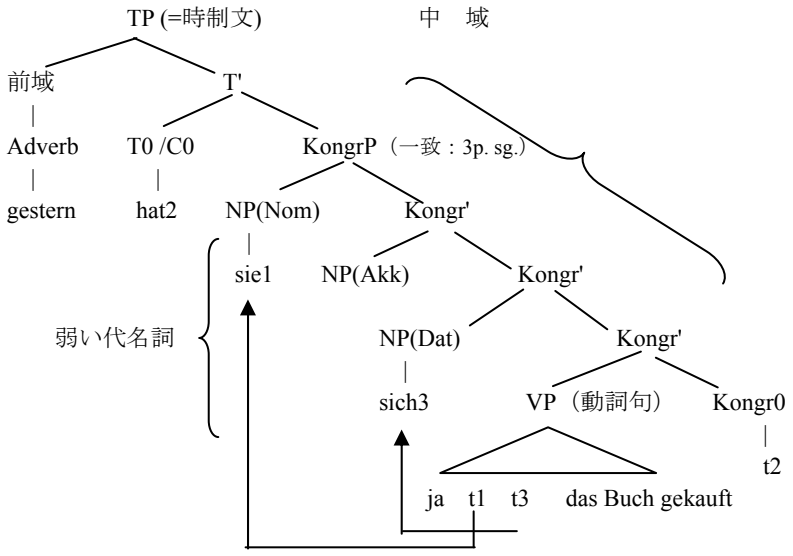
(11)a. weil sich Hans normalerweise nicht schämt, ...

b. weil {er sich } {*sich er } normalerweise nicht schämt,...

(11b)で、主語の "er"は接語ではなく名詞句(NP)を代理する代名詞であるので、これに後続する sich を接語と考えることはできない。いずれにせよ sich を含めた弱い代名詞が中域の最初の位置付近（これは一般に Wackernagel 位置と呼ばれる）に引き寄せられることは確実である。この語順は特に内在的再帰用法において必須なので、随意的移動(scrambling)とは区別すべきである。生成文法の枠組みで、定形や従属接続詞を含めた文構造を次のように仮定することにしよう：

(12) X バー構造： [$_{XP}$　ZP（指定部）[$_{X'}$　YP（補部）　X^0 （主要部)]]

(13)　((9a) の構造):



基本的な項構造（主語、間接・直接目的語、動詞）は SOV の形で動詞句(VP)の中で生成され、心態詞等は VP の左側に位置する。一致素性(Kongr)は動詞句を補部にとる機能範疇で、左側の指定部 KongrP に弱い代名詞を格納し、そこで代名詞の構造格（1, 4, 3 格）を照合する（t: 移動の痕跡)。元々右端の Kongr にあった konnte はその上の時制 T0 位置に移動する。副文では T0 位置に従属接続詞(補文標識 C0)が挿入され、定形は移動しない。その他は(13)の構造と同じである：

(14) [[$_{C0}$　weil] er　sich [$_{VP}$ so geduldig mit jedem benehmen][$_{Kongr}$ konnte]] (Johnson)

sich　が先行詞である主語よりも左側に現れるというのは束縛関係の点で一見奇妙である。実際、４格目的語を先行詞とするケースでは、sich が先行詞 "die beiden"を越えて左側に生じる例(=(15a))は非文法的になる：[2]

(15) a. *Wir überließen　sich $_1$　die beiden $_1$.

b. Wir überließen die beiden $_1$　sich (selbst) $_1$.

しかし先行詞が主格主語である場合、主語と一致素性(Kongr)は同じ指標をもっており、この指示指標が sich　の先行詞となると考えれば問題は解決する：

(11a')　weil　[$_{KongrP1}$　[e1]　sich1] [$_{VP}$ Hans1　normalerweise nicht　t1　schämt] Kongr1]

"Hans"が強い名詞句なので表面上は VP の中にあるが、 [e1] 位置は原則的に主語の位置であり、これを支配する一致範疇 KongrP は同一の人称・数の素性を共有する。この領域内にあることで sich の照応束縛関係が成立する。

この統語分析によれば、(2)の sich は単に動詞の一部ではない。例えば動詞の一部である分離動詞の前綴りは基底の動詞位置に隣接し、移動は生じない：

(16) a. weil Hans heute sehr früh [aufstand] ...
b. Hans stand heute sehr früh [auf __] ("stand"が定形位置に移動）

sich が動詞の一部であるなら、前綴りと同様に中域末尾に現れうるが、既に見たようにタイプ(2)では中域の左側（一致要素の領域）に生起する：

(17) a. Hans schämt sich normalerweise nicht .
b. *Hans schämt normalerweise nicht sich .
c. Hans bewundert normalerweise nicht sich . （(1)では sich の後置が可能）

従って、(2)の sich に関して次の一般化がえられる：

(18)：タイプ(2)では再帰代名詞が動詞句を離れ、中域の最初に移動する。

更に、タイプ(1),(2)に関して次のような統語上の相違が観察される：

(19) タイプ(2)では再帰代名詞を話題化（前域移動）できない：

(20) a. [Sich] bewundert Hans normalerweise nicht.
b. [$_{VP}$ Sich bewundert] hat Hans normalerweise nicht.
(21) a. *[Sich] schämt Hans normalerweise nicht.
b. *[$_{VP}$ Sich geschämt] hat Hans normalerweise nicht.

照応的用法(1)では、 sich を話題として際だたせ、他の対象と対比できるが、内在的用法(2)では話題化はできない。sich + 動詞（過去分詞等）全体を前域に移動する場合でも同じ対比が現れる((20b) vs. (21b))。これも内在用法の sich が動詞句の外に移動する(=(18))ことから派生する。もっとも(19)の制約は sich にあてはまるが、 sich selbst であれば許容できる場合もある。インフォーマントによれば、(22)の文は sich selbst に強い対比アクセントを置けば、容認可能である：

(22) Für seinen Vater schämt sich Hans oft. Aber [**SICH SELBST**] schämt Hans normalerweise nicht.

この対比は注目に値する。sich schämen の sich が動詞の一部であれば、(21), (22)の前域移動の対比は予測できない。(2)の再帰目的語は通常は動詞の項（文成分）の地位をもたないが、特定の文脈を設定すれば話題として対比でき、動詞の項となれる。つまり、(2)も(A)の観点から把握されうるということになる。

2. sich と sich selbst の対比

ドイツ語で再帰形を表す他の語彙手段として sich selbst がある。selbst 自体は他の名詞句にも付加でき("der Lehrer selbst")、単独で副詞になるので、sich selbst は [NP [NP sich] [Adv selbst]] という複合名詞句として分析できる。sich selbst は強勢を置くことができ、項になるので強い再帰形と呼び、sich を弱い再帰形と呼ぼう。２つの用法はあまり注目されてはいないが、統語的にも対比をなす：

(23) a. Peter1 wäscht {sich1 / sich selbst1 }.（タイプ(1)）
b. Peter1 stellt {sich1 / *sich selbst1 } die Landschaft vor. （タイプ(2)）
c. Peter1 hat {sich1 / *sich selbst1 } gut erholt. （タイプ(2)）

(24) Wir überließen die beiden1 { sich selbst1 /??sich1 }.

(25) Die Studenten1 hörten die Lehrer2 über {sich1/$_2$ /sich selbst2/*$_1$ /sie1 } sprechen.

(1)の(23a)では sich, sich selbst いずれも可能だが、(2)の(23b),(23c)では sich selbst は非文である。又、４格目的語を先行詞とする(24)では強い再帰形が好まれる。(25)の AcI 構文では、前置詞句に支配された弱い再帰形 sich の先行詞は不定詞句の主語 "Lehrer"でも、主文の主語でもよいが、sich selbst になると、先行詞は一番近い不定詞句の主語だけとなる（強い再帰形は動詞句から外に移動しない)。そこで、(23)の対比から次の一般化を導くことができる：

(26)： (2)のノーマルな再帰形は弱い形態 (sich)でなくてはならない。

3. 再帰動詞の語彙意味論

Hider(1985)によれば、(2)は非人称動詞を経て(3)の中動動詞から派生した：

(27) Es freute ihn (daß ...). → Er freute sich. → 内在的再帰動詞

再帰動詞から非人称動詞への逆転もあるという。scamen(=schämen)は古高ドイツ語で既に

再帰動詞として用いられたが、後の時代でも"Es hat mich geschämt und gegrämt." (Behagel(1924)) といった非人称用法がある。この変化は、Haider によれば次のように分析できる：(2)は(3)の他動詞→自動詞への転換と同様の語彙化を受けた。この過程で動詞が選択する意味関係（主題役割）が変化した：

(28)a.　bewegen の意味役割：< 動作主（主語）,動作の主題（４格目的語）>
　　b.　sich bewegen の意味役割：< 動作の主題（主語）,動作主（sich）>

タイプ(3)では sich に動作主の役割と構造格の４格が付与されたために、格を失った元の目的語が主格の位置に上昇する。(3)の中動動詞は(ärgern, freuen 等の）有生の４格目的語をとる非人称動詞から主語が有生の人称動詞を作る手段である。更に(2)では sich 以外の目的語をとる他動詞用法が消えた(Haider(1985))。

しかし、主語が有生＝人間である人称動詞への推移は絶対ではなく、gelingen, gefallen, gehören, fehlen など無生の主語をとる動詞も他に幾つもある：

(29)　Dieses Buch hat mir gefallen.　(gefallen: <主題（主語）, 3 格経験者>)

しかも、"freuen"タイプは現在でも主語が無生の意味関係もとりうる：

(30) Das Geschenk hat ihn gefreut.　(freuen: <主題（主語）, 4 格経験者>)

(29)と(30)の目的語は有生の経験者だが、(29)には再帰用法はない。従って有生主語への変化という動機は弱い。確かに(29)の目的語が３格で、(30)が４格をとる点では違う。(2),(3)タイプの再帰形で３格が現れるのは４格目的語もとる動詞だけだという観察もある (Heidolf u.a.: 333)。この事実自体は、１・４格が構造的な格であり（sich の生起で目的語が４→１格に上昇）、３格は４格目的語の存在によってのみ（語彙格ではなく）構造格となりうることを示唆する。Haider の分析は興味深いが、しかし、これではまだ、なぜ (2)タイプの動詞だけが他動詞用法を失い、再帰的用法しかもてなくなったのかは説明できない。

この問題との関連で興味深いのは、Burzio(1994)の次の提案である：

(31) 「弱い照応形の原則」：(Burzio)
　　内在的な同一指示関係 （意味論）← →　弱い照応形（形態論）

(31)は、動詞などの語彙的意味の中に同一指示（照応）関係が内包されている場合は、その言語の語彙の中の形態的に弱い再帰形を使うことがデフォールト値となることを表している。形態的な強弱は個別言語ごとに異なるが、Burzio によれば(32)の尺度が考えられる

（ドイツ語の部分は筆者（吉田）が追加した）：

(32)　形態的な強さの尺度 (vgl. Burzio(1994): 60)：

	1: ϕ（ゼロ）	2: 接語(clitic)	3: 非接語(non-clitic)	4: 項の強調語
a.	ϕ	si	sé	se-stesso（イタリア語）
b.	ϕ			himself etc.（英語）
c.	ϕ		sich	sich selbst （ドイツ語）

(31)と(32)の対応関係は次のイタリア語の例で示される(Burzio(1994))：

(33) a. Gianni apre gli occhi. (= Gianni macht die Augen auf)
b. Gianni si taglia i capelli. (=Gianni schneidet sich das Haar)
c. Gianni ha aizzato [Maria1 contro di { se-stessa1 /* sé$_1$ }].
(Gianni hat veranlaßt Maria1 gegen sich-selbst1 / *sich1)

「目を開く」(=(33a))は目を（自発的に）開けるという意味で内在的に再帰的な行為であり、最も弱い再帰形のゼロ形態になる。「髪を切る」(=(33b))対象は自分の髪でも他人の髪でもいいので、同一指示関係では中立的であり、弱い接語が生じる。他方、"X gegen Y"のような他動的前置詞は内在的に非再帰的（x と y が別物）なので、(33c)のように「自分自身に逆らわせる」という特殊な対比的な文脈では最大限に強い再帰形(se-stesso)が用いられる。

この再帰性の意味的な対立はドイツ語でも容易に証明できる。身体部位を表す際によく３格の sich が現れるが、その使用もこの意味的尺度に応じて異なる：

(34) a. die Arme kreuzen（腕組みをする→内在的再帰性・自発：sich がない）
b. sich den Arm brechen （腕を折る→再帰性はあるが、非自発的：sich ）
c. jemandem unter die Arme greifen（～を助ける→内在的に非再帰：sich 以外）

全ての他動詞で再帰性（同一指示）の有無が意識化されるかは明確ではないが、特定の述語では内在的再帰性の意味に関する連続的尺度が仮定できるだろう：

(35)： 内在的再帰性←・・・（中立）・・・→内在的非再帰性（他動性）

この Burzio の分析を再帰動詞に応用すれば、(1),(2)の形態統語論的な相違が説明できる。ドイツ語にはイタリア語の接語に対応する語はないが、弱い再帰形 sich と強い再帰形 sich selbst はある。内在的再帰性を意味しないタイプ(1)で同一指示関係を表す場合はどちらでもよい（解釈に曖昧性があれば強い再帰形）。例えば

bewundern（感心する）は経験者と経験の対象（Thema）をとる２項述語で、再帰的意味をもたないので、再帰文脈で sich , sich selbst　のいずれも可能である：

(36) bewundern:　２項述語：< 経験者（主語）,　経験主題（目的語）　>
　　|___* _____|　内在的に非再帰的

目的語が主語と照応関係にあっても、通常の項として話題化も可能で、動詞句の中（中域後方）にとどまれる。他方、erholen（回復する）は他人の力では影響を及ぼせない内在的再帰意味を表すので、sich　しかとることができない：
(37) erholen:　　２項述語：　< 経験者（主語）,　経験主題（目的語）　[+dep] >
　　|_____|　内在的同一指示

"erholen"の sich　は経験の主題というより「自分から・自分に関して」という自発的意味をもつのかもしれない。いずれにせよ(2)の sich　には動詞から一定の意味役割を受け取るが、これは主語の指示解釈に完全に依存する（レキシコンで従属を表す[+dep]素性が付く）。この項構造は統語構造に反映し、内在的再帰動詞の sich も項構造としては見えている。しかし、意味論レベルでは主語と目的語の間に内在的な照応関係が成立し、特殊な文脈がなければ、それ以外の解釈は不適格となる。従って弱い再帰形以外の名詞句が現れる余地はなくなってしまう。

興味深いのは、(2),(3)の動詞の多くが経験者を主語に持つ心理動詞であり、再帰性（心的出来事は経験者だけに属する）を内包することである。例えば：

(38) 2)　gedulden, schämen, wundern...　　3) ängstigen, ärgern, freuen, interessieren ...

格交替が起きるタイプ(3)は２つの表現で意味関係が変わるとも考えられる：

(39)　a.　Der Artikel　ärgert ihn.　　b.　Er ärgert　sich über den Artikel.

(39a)の主語は経験者"ihn"を怒らせる主題だが（記事の作者に感動し、内容が怒りを惹起する場合もある）、(39b)の前置詞目的語は怒りが向かう目標(Ziel)である。すると(3)の中の心理動詞グループは＜主題、経験者>＜経験者,自発主題(sich), 目標>という２つの意味役割をもつことになる。他方(2)の意味役割は＜経験者,自発主題(sich),（目標）>だけであり、内在的再帰動詞だけになる。[3]

4.　結論

以上の議論を文法的な派生として定式化すれば、次のようにまとめられる：

(40) ドイツ語の再帰動詞の派生に関する規則：

レキシコン：内在的再帰動詞の再帰形は[+dep]素性をもつ。

形態論：sich　は形態的に弱い再帰形、sich selbst は強い再帰形である。

統語論：[+dep]をもつ従属的名詞句は動詞句から中域左側に移動せよ。

意味論：内在的再帰文脈では通常、弱い再帰形を使用せよ。

英語の再帰形には代名詞と融合する形(himself etc.)しかなく、この複合形は強い再帰形である。それ故英語では再帰文脈に対応する形態上の対比はゼロ形態と強い再帰形しかない。ここから中動構文などでドイツ語との対比が生じる：

(41)a.　The door opened.　　b.　Die Tür öffnete　sich.

(42)a.　The book sells well.　　b.　Das Buch verkauft sich　gut.

この中動動詞（構文）における sich　の分析については今後の課題としたい。

注

1　３人称２格では人称代名詞と同じになるので、例えば"Hans gedenkt seiner"では"seiner"は主語を指す解釈も他者を指す解釈も許す。(Eisenberg(1989)参照)

2　幾つかの例文の文法性判断についてはインフォーマントとして Christa Kojima-Ruh, Helga Kaussen 両氏に協力していただいた。ここに謝意を表しておきたい。

3　Pesetsky(1995) も心理動詞について同様の提案を行っている。

参考文献

Abraham, W.(Hrsg.) (1985): Erklärende Syntax des Deutschen.　Tübingen.

Abraham, W.(1995): Deutsche Syntax im Sprachvergleich.　Tübingen.

Behagel, O. (1924): Deutsche Syntax.　Band II.　Heidelberg.

Burzio, L.(1994): Weak Anaphora.　In: Cinque, G. u.a. (Hrsg.): Paths Towards Universal Grammar. Washington, D.C. 59-84.

Duden. Die Grammatik der deutschen Gegenwartssprache (1984).

Eisenberg, P.(1989)^2:　Grundriß der deutschen Grammatik.　Stuttgart.

Grewendorf, G.(1984): Reflexivierung im Deutschen.　Deutsche Sprache 1. 14-30.

Haider, H.(1985): Über *sein* oder *nicht sein*: Zur Grammatik des Pronomens sich.　In:

Abraham(1985), 223-254.
Heidolf, K. u.a.(1981): Grundzüge einer deutschen Grammatik. Berlin.
Lenerz, J.(1994): Pronomenprobleme. In: Haftka, B.(Hrsg.) Was determiniert Wortstellungsvariation? Opladen. 161-174.
Pesetsky, D.(1995): Zero Syntax. Cambridge, Massachusetts.
吉田(1992): テクストにおける照応代名詞の解釈. 『ドイツ文学』88. 46-56.å